

本番見据え、高校で模擬投票

「誰に」悩める若人

参院選（7月10日投票）の期日前投票が各地で行われ、新たに選挙権を得た18、19歳の若者も投票所に足を運んでいる。県立高校は、実際に立候補している候補に一票を投じる模擬投票を全校でスタート。高校生の投票率アップに期待が高まるが、生徒からは「本番ではどうやって選べばいいのか」と困惑する声も。10代の目で政治を読み解き、有権者の「選択眼」を養う政治教育の課題が、改めて浮かび上がった。

（参院選取材班）



授業を終えた生徒たちが会議室の「投票所」に続々と集まり、投票用紙に政党と候補者名を記入して投票箱に入れていく。29日、県内144校のトップを切つて全学年で模擬投票を実施した平塚工科大学（平塚市）

「選択眼」養成に課題

決まればいいのかわからなくて、悩める若人。国のために動いてくれそうな人に投票したい。担当の川上司教諭は「政治参加の意識が高まり、生徒には良い予行練習になったと思う」と、「本番」につなげることに期待を寄せた。

ただ、生徒の中には選択の難しさを痛感する声も。3年の鯉沼拓海さん（18）は「演説を聞いてもいろんな主張があつて、どうやってただ、生徒の中には選択の難しさを痛感する声も。3年の鯉沼拓海さん（18）は「演説を聞いてもいろんな主張があつて、どうやって

「投票先を決めるための考え方などについて事前学習で教えるのが理想」としているが、投票手順の確認の意識や課題解決の力を高める「シニアインシブ教育」に取り組んでいるものの、具体的な政治的課題の扱い方に慎重な高校もあり、まだ浸透していないのが現状だ。



高校生が選挙の手順を体験した模擬投票（平塚工科大学）



各政党は漫画風パンフレットや無利子奨学金拡充などで若者受けを狙ったような政策を掲げているけど、突然言われても本気がどうか疑ってしまう。選挙前だけ理想を語るのではなく、身近な問題を掘り起こして解決に導くことができる政治家を見極めたい。

小学4年から地元のNPO活動に参加し、地域活性化に向けて地

社会を変える1票を

元の大人たちとさまざまなイベントを企画してきた。今年1月には渋谷駅前若者約200人に「18歳選挙権」について聞いた。「1票で社会は変わらない」「誰に投票しても同じ」という声が多かったけど、最初から諦めていたら何も変わらない。せっかく貴重な権利があるのだから、無駄にするのはもったいない。（横浜市都筑区）

橘学苑高校2年

百崎 佑さん（16）

期テストの時期が重なる高校は、対応に苦慮する。

鶴見高校（横浜市鶴見区）は30日、全校生徒に事前学習を実施。生徒は地域の身近な課題と各政党の公約との関係を考えて。期末テスト最終日の7月6日に模擬投票を予定しているが、徳原拓哉教諭は「テストを控える生徒に負担がかかるのではないかと心配もある。選挙前に慌ててやるのではなく、継続的に取り組んでいく必要性を感じている」と話す。